

金相寺 寺報

遇

～ぐう～

Encounter magazine "Guu"



東寺 不動明王坐像(国宝)

9月

September 2017

No. 13

かみこ くじゅうねん
紙衣の九十年

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、九十歳でお亡くなりになりました。

その人生を通してお伝え下さったお念仏の教えは今もなお、人々の心に響き、生きる勇気と力を与え続けています。悪人正機説や肉食妻帯されたということで有名ですが、一体親鸞聖人とはどのような方だったのでしょうか。

ここでは親鸞聖人のご人生について共に触れていきたいと思えます。



● 親鸞聖人滅後と今

親鸞聖人御入滅後、翌二十九日には東山の延仁寺で火葬を執り行い、三十日に鳥辺野の北の大谷に納骨して墓標が立てられました。そうして、喪主を務められた覚信尼さまは直ちに越後の恵信尼さまに、これらのことを事細かくご報告されました。

雪深い越後で悲報を手にした恵信尼さまが別離の悲しみを抑えて、「昨年十二月一日付のお手紙は同月二十日過ぎに確かに拝見しました。何はおいでも、殿がお浄土へ往生あそばされたことは間違いなく、改めて申すまでもございません」と書き出されるお手紙があります。これは恐らく、覚信尼さまのお手紙の中に、法然上人のご往生のときには瑞雲がたなびくなどの奇瑞が各所にあつたと伝えられておりますのに、父親鸞聖人のご往生のときには奇瑞も何もなかったということ、その思いのままにお手紙にしたためられたからでしょう。

それで、恵信尼さまがわざわざそのことに触れておられるのです。恵信尼さまは親鸞聖人八十八歳の年齢の記載のあるお手紙をご覧になったことがあるのでしょうか。そこには、真信心の人の往生は臨終の善し悪しを言わぬこと、そして平生に念仏して、愚者になりて往生する旨がしたためられています。



しかしこのことは、拝見なさらぬとも、聖人が常にお話しになつておられたことでもあり、そして恵信尼さまの

耳の底に響いているお言葉でもあったのでしよう。ですから、覚信尼さまへのお手紙に、奇瑞があるうとなかろうと、親鸞聖人のご往生は間違いないとおっしゃられたのです。

そして、このことはさらに後年、恵信尼さま八十七歳の時に、「お念仏を大切に相続して、ともにお浄土で会いましょう」というお手紙を書いておられることに証しし、それがまた母親として子孫に懸ける大きな願いでもあったことでしょう。

このお手紙を最後に、恵信尼さまもまたお浄土へ還って往かれたのでした。本願念仏に生きられた親鸞聖人のいのちは、如来大悲の恩徳を讃嘆した多くの言葉となって、今日なおも生き続け、無数の念仏者を生み出し続けています。

親鸞聖人が亡くなられてからというもの、関東や京都の人々が聖人の遺徳を慕って、墓所に歩みを運ばれました。参詣する人は年毎に増えてゆきました。それで、そうした方々へいろいろ便宜

を図り、高田の顕智房やご門徒の協力を得て墓所を改め、六角のお堂を建てて聖人の影像を安置するなどして、外形が整えられました。



また、覚信尼さまとその子孫が留守職としてお堂をお守りすることとし、敷地や建物は門弟たちの共有とするなど、みんなの力で廟所の維持をするなどなどが取り決められました。これが現在、大谷本廟といわれるものであり、本願寺教団の基となったのです。

了

大谷本廟
(京都東本願寺)



大谷祖廟
(現在の親鸞聖人の墓所)



※親鸞聖人のご人生に少しでもふれていただきましたたく寺報発刊から続けてまいりました『紙衣の九十年』は今回で最終回となります。ご愛読ありがとうございます。



【利益】

当院の定例法要は修正会から春秋の彼岸会、盂蘭盆会、そして報恩講と年五回の法要が勤修されるが、その都度お仏具をお下げてお磨きをしているので、年五回のお仏具のお磨きをしていることになる。現在は愚生と副住職の二人でお磨きをしているが、数年前突然の病気で亡くなった○氏が「軍隊に行っていた間、上官の洗面器をよく磨かされたものですよ」と仰って、生前十年以上に渡って欠かさずお仏具のお磨きの手伝いに来てくださっていた。そんな或る年の暮、修正会を迎える準備の為、愚生、坊守、そして○氏の三人で黙々とお仏具を磨いていた時、○氏が独り言のように「来年の初詣は何処へ行こうかな」と云われた。それを聞いた愚生は○氏に「貴方は此の寺

の檀徒なのだから、初詣はまず手次寺の金相寺にお参りされるのが大事ですよ」と話すと、○氏は妙な思い込みがあつた様子で、「そうなんですか。私は昔から菩提寺は御先祖の菩提を弔つてくれる処で、生きている我々を守つてくれるのは不動尊だと年寄りから聞かされてきた思いがあり、初詣は毎年不動明王が祀られてある成田山新勝寺、川崎の平間寺、日野の高幡不動、目黒の不動尊等々を親しい友人とお参りに行っていたが、来年からは金相寺へ初詣に来ればいいんだ」と云いながら仏具のお磨きを了え、帰って行かれた。そのお磨きの日から一週間後に新年を迎え、愚生は内心○氏は当院へ初詣に来てくださるだろうとお待ちしていたが、残念ながらお参りくださらなかった。

○氏は何年もお仏具のお磨きをお手伝いくださり、また法要には欠かさずお参りに来られる方なので、その後お会いしても初詣の件は、忘れた様な顔をして口に出さなかったが、内心は一抹の寂しさを感じていたことを今更ながら思い出される。



不動明王像
(成田山新勝寺)

○氏が初詣には必ずお参りに行っていたと云う不動明王とは、菩薩の求道の邪魔をする悪魔に対して、仏がお怒りになった御相と聞く。右手に利剣を、左手には羂索を持ち、後背には燃え盛る火焰。見るからに恐ろしいこの不動明王の相は何を意味するのか。身勝手な利己的欲望に対して、そのような煩惱は右手の利剣で切り捨て、左手の羂索で捕縛し、後背の火焰で焼き尽くしてしまふぞという用きを象徴した相であるとするれば、先の○氏は毎年如何なる思いをもつてお参りされていたのか今更知る由もないが、不動尊を参拝される方の中に「我が身は欲深き煩惱に

支配され苦悩しております。どうか私の内に蔓る利己的欲望の悪魔を切り刻み、焼き尽くしてくださいますように」との思いで参拝されるならわかるが、利己的欲望成就を願ってお参りされるのであれば、大変な矛盾ではないか。

このようなことは不動尊信仰に限ったことではない。国内の観光案内のパンフレットによく神社仏閣が紹介されているが、神社はさておき、寺院でも「この寺は何々の御利益がある」などと靈驗灼なることを強調したものをよく目にするが、宗教的利益は精神的福德であり、現実的物質的福利があるとしても、それは余徳というか精神的功徳に付随して生ずる福利である。よく云われる例として「米を得れば自ずと藁をも得る」ということである。それを、米を忘れて藁を求めんとするは、大変間違いである。宗教にその余徳を求めて信仰するとするならば、それは邪義の道である。実際に世の中には邪義と思われる宗教が数多存在する。

先日京都の法衣店の方が来られ、そ

の方から聞いた話であるが、京都の南座の近くに仲源寺というお寺があり、その寺に「めやみ地蔵」というお地蔵さまが祀られている。この地蔵さまは鎌倉期に大雨が降り続いて、鴨川が氾濫し、その土の中からお地蔵さまが現れたので、村人はそれを寺に祀ったところ、突然雨が止んだので「雨止地蔵」と呼ばれて村人に親しまれて来たが、何時の頃からか「あめやみ地蔵」の「あ」の字だけが抜けて「めやみ地蔵」と呼ばれるようになり、それが「眼病地蔵」となって、今日では全国津々浦々から眼を病んでいる人々の参拝が絶えないとのことである。「雨止地蔵が眼病地蔵に渝り益々信仰されるとするのは妙なものですね」と法衣店の方は訝しげに話されていた。



仲源寺
目やみ地蔵

似たような御利益信仰は全国到る処にみられるが、面白い処では愚生も寄ったことがあるが、鎌倉大仏高徳院の裏手というか、北側に銭洗弁天というのがあり、そこに筈が用意されており、その筈にお金を入れ境内の湧水につけて洗うとお金が殖えたと信じられているとのことであるが、愚生が思うに、多くの人の欲の垢の付いたであろうお金を洗い清めることで、吾が貪欲の心の垢も洗われて金銭に執着しない身と成れば、それが一番の財産になるのではないかということ、この銭洗弁天は教えてくれているのではないかと愚生には思われるのだが。

ところで、最近あまり耳にしなくなつたが「ポックリ寺参り」というのがあった。あまり長患いするのは廻りにも迷惑かけるし嫌なので、死ぬならポックリ死にたいということなのである。長患いは廻りに迷惑かけるといふが、元気な内は廻りに迷惑をかけていないと思つているのだから。達者な時こそ廻りに数多の迷惑をかけてい

ることに気付いていないだけなのでは。

埼玉の寺の住職から聞いた話だが、或る老人会で長野にあるという「ポックリ寺」へ観光バスでお参りに行ったのだが、帰りのバスの中で老人会の人々が本当にポックリ亡くなってしまったとのこと。それ以来、その老人会ではポックリ寺へのお参りは止めたという笑い話のようなことを聞いたことがあるが、兎に角、此の様な現世利益信仰は、それぞれのお寺の本来説かれていた教えを履き違えた信者側の妄念が画いた迷信的現世利益信仰と思われる。

そもそも抑、利益を説かぬ宗教はないが、同じ利益といっても宗教的に真実と虚偽がある。仏教において「仏に救われる」と表現されるが、実際は仏の教え、つまり仏法に救われるのである。されば、仏法に遇うことで人間が救われるのであり、人間が生きていく上に都合のよい状況を祈ることによって与えてくれる如き靈力を有する人格的仏の存在を説くとすれば、それは邪義の宗教である。

先日境内の草むしりをしてしていると、

掲示板を熱心に見ていた見知らぬ人が、愚生に話しかけてきて云うには「私は或る宗教に入信しているのだけれども、ここは浄土真宗と書いてありますが、浄土真宗は死んだら極楽に生まれると説く来世主義の教えだと聞いているが、来世なんて本当にあるのか」と聞くので、「貴方はどう思っているのか」と聞き返すと、「来世なんて実際は存在しないでしょう。人間は死んだらお仕舞いですよ」と云うので、愚生は「貴方はそれで人生の解決が果たしたつもりか。人生は旅だというが、旅を愉しむことができるのは、帰る我が家があるからだ。人生を旅とするなら、貴方は還る処のない旅を歩んでいることになる。還る処のない旅を貴方はよく陽気に続けていられるものですか」と話すと、その人は怪訝な様子で帰っていかれた。

この人の様に浄土真宗の教えを愕く程の履き違いをして理解している人が多くいるのであるが、親鸞聖人程宗教的眞実なる現世利益をお示しくされ

たお方はないのである。

「南無阿弥陀仏」無量寿無量光、時間的に無限空間的に無限なる世界を知り尽くされた眞実なるみ仏の「救い難い汝を眞実なる浄土の世界に必ず救わにゃおかぬ」と仰せられる御仏の御本願に覚め、ひしと縋る思いで念仏申さるとき、時空を超えた撰取不捨の利益の中に生かされる身とさせていただくとは、これ以上の利益があるうか。念仏者は如何なる時でも、如何なる処に居ようと、阿弥陀仏の救いの中に生かされるのである。ただただ有難く勿体ないことである。

成田 宣信（金相寺住職）

合掌



御同朋の声

【自分流の「終活街道」迷走中】

金相寺門徒総代

竹本 康雄氏

定年、再雇用と会社勤めも終わり年金生活を送り始めて、新聞、テレビ等で「終活」の文字が目に入ってくる。

意味を調べると「人生の終わりをより良い物とするため、事前に準備を行うこと」とある。では何をすればよいのかインターネット、新聞等を見てみると、「エンディングノートをまとめておく」、「お葬式を決めておく」、「財産や相続をまとめておく」、「自分の荷物を片付けておく」、「お墓を探しておく」等があるようだ。まあ内容としては生存中に決めて置けば、いざと言うとき家族に迷惑をかけない様にする。病気になるって弱気になる自分も早く

決めなければと思う反面、元気になるとまだまだ長生き出来ると勝手に思い込みなかなか始められないでいたが、いざと言うとき困るので出来るものから少しずつ始めはじめた。

「エンディングノート」は、自分がしてほしい事を思いつきたびに少しずつ記入している。「お葬式を決める」は、今の所自宅で家族葬と想っているが、まだ葬儀屋に相談しに行く気にならない（まだまだ元気で迎えるは来ないと思っているのは自分だけ・・・）。

「財産や相続」は、残すほどの財産は無いので、家族と親戚に迷惑をかけるないように葬式の費用を残して、後は生活を楽しむ事とする。

「自分の荷物を片付ける」は、断捨離を兼ね大物家具を処分。ゴミ屋敷に成らないよう日々家の中を掃除中。ただ、写真類はなかなか分切りが付かず停滞中。

「お墓を探しておく」は、お墓はあるが子どもが居ないので家族が亡くなれば無縁墓地となる。その前に合同供

養墓に改葬を考えているが自分がまだ元気なうちは出来る限り今のままで墓を守って行きたいし、改葬、リフォーム等の手続きを調べてみると、墓地の管理者及び自治体等の申請も必要でなかなか先に進めないでいる。合同墓地を探索と共に、金相寺ご住職に閉眼供養及び納骨供養の方法も教えて戴かなくてはいらない。

昨年から金相寺さんのお手伝い及び同朋会に参加させて頂き、浄土真宗の教えを勉強させて頂いてみて少し分かった事は、終活をして家族と親戚に迷惑をかけない様にするのも大切だが、浄土真宗の教えは、現世で「往生の生活」を送ることが大事であるとする。

何時までも元気で大いに食べて遊んで、寝たきりになって家族に迷惑をかけるないようにして健康寿命を送り最後はピンピンコロリである世へ行ければと思っている。

これが自分にとつて本当の「終活」では・・・？



どうぼうかい

同朋会

歎異抄勉強会

【現代語訳】

《 第三条 》

善人でさえも、真実の自己になることができる。まして悪人はいうまでもないことである。ところが、世間では「悪人でさえ真実の自己になれるのなら、まして善人はいうまでもないことである」と言われている。(中略)自らの煩惱(欲望・不安・後悔等)に振り回されている私たちは、どれほど人間的な努力を尽くしてみても、そうした苦しみの生活から根本的に解放されることはありえない。このような私たちを深く悲しまれて、本願を起してくださったのである。その本願の御ところは、そのような悪人をこそ真に解放してくださるのである。だから、他力にすべてをおまかせする悪人の自覚こそ、真実の自己になる根本的要因なのである。(後略)

親鸞は「他力をたのみたてまつるのが

「悪人」だと述べます。つまり自己に「悪人」を定義できるような力があるのであれば他力をたのむ必然性がありません。

自分で自分のことをよくわかつている人間を「善人」と言うのでしよう。(中略)理性的で道徳的な人間は、自分の品行な心を繕い善人であるかのように思い上がって浄土へ往生しようとする、その考えをこそ「自力」というのです。これが親鸞の見ていた「善人」の内面です。つまり、そこには阿弥陀さんが介在する余地がありません。(中略)

自分の内面は「善人」そのものです。阿弥陀の愛などまったく不必要、自分なんでもできると思っているのですから、まさに阿弥陀の愛に背いているのです。その阿弥陀の愛に背いている者を「善人」と批判し、その偽善の「善人」を「汝、悪人よ」と呼びかけてくださるのが阿弥陀の愛です。自分で自分を悪人と定義できる力を私はもちません。どこまでも阿弥陀の呼び声の中にしかないのです。

(本文より抜粋)

所感

『歎異抄』第三条は、「悪人正機」といわれ、学校の教科書にも載るほど、とても有名な教えです。

この三条では「善人・悪人」ということについて語られますが、文頭から親鸞聖人のいう「善人・悪人」が私たちのそれとはまったく違うであろうことがわかります。私たちが考える「善人・悪人」とは、法律や道徳といった人間が作り出したモノサシではかりません。しかし、親鸞聖人は「人が人を定義することなどできないのだ。むしろ、そのように定義できると思っているところこそが思い上がりの罪深いところである」と教えます。

親鸞聖人の「善人・悪人」とは阿弥陀如来より見い出されている私たちの在り方を意味しているのです。どこまでも自己を「善人」として生きている偽善の私の罪深さを、ここでは呼びかけてくださっているのです。

釋宣明

副住職の

日々の出遇い



● 夏の子ども会「報告」

夏の恒例行事「夏の子ども会」を今年から創志館く相模原てらこやく主催で八月一日(月)に開催いたしました。

今年は、桜美林大学の学生さんたちが大勢参加してくださり、最近流行りの仮想通貨?を配ってプチ縁日を体験してもらいました!

内容は恒例のかき氷にわた菓子、流しそうめんのほか、輪投げにヨーヨーすくいなど、みんなが大好きなものがかり。猛暑にも関わらず、みんな大盛り上がりでした!



お寺ですから、これは欠かせません!
背筋を伸ばして、正座をして
みんなでお勤め!
ナ～ム～♪



↑
一番人気は輪投げでした♪
長い行列を作って順番待ち♪

ヨーヨーすくいに
スーパーボールすくい
たくさんGETして大喜び♪
↓



みなさん本当にありがとうございました。次回の子ども会は十月二十一日に、秋の子ども会・親鸞聖人御命日の集い「こども報恩講」を開催予定です。是非有縁の方々お誘いあわせの上、お気軽にご参加ください。

今後の予定

法要

九月二十三日 秋彼岸会
十一月十二日 報恩講

勉強会など

十月七日 午後二時～
同朋会 く歎異抄学習会く
(輪読・座談会)

※ 偶数月(二、四、六・八・十・十二月)
の第一土曜日に開催予定。

十月二十一日
秋の子ども会

(子ども会・青年会報恩講)

※ 詳細はホームページをご覧ください

毎月一回 仏教青年会

※ 毎月の開催日等、詳細はホームページを
ご確認ください。か電話・メールにてお問
合せ下さい

予定は都合により変更する場合がございます。
詳細は随時ホームページをご確認いた

編集者雑感

「家族葬」や「直葬」などという葬儀スタイルが最近増えつつある。家族や親戚、近所付き合い等々のかたちが変わってくるなど様々な事情があるなかで、現代人のニーズに合わせてかたちが変わってきているのである。しかし、最近の葬儀事情を見ると、どうもそういった理由とはまた違ったかたちで葬儀を簡略化、簡素化していかうとする傾向があるようだ。

驚かされるのは、近々ドライブスルーの葬儀場ができるというのである。足腰の悪い人やわざわざ喪服に着替えて葬儀の開始時間にお参りできない人たちのためだとか。また、葬儀のIT化も進んでいるようだ。葬儀に参列できない人のためにインターネットでライブ配信したり、読経、法話もロボットが勤めるのだという・・・。

こういったニュースを目にする度に、葬儀をはじめとした仏事を勤める本当の意義が見失われつつあることを思う。それは故人と我々生者との関係性が失われつつあるということではないだろうか。

『遇くぐうく』第十三号
発行 浄土真宗 霊苔山 金相寺

〒252-0328

神奈川県相模原市南区麻溝台726-1

TEL 042-778-2879 FAX 042-711-8257

e-mail info@konsouji.com

URL <http://www.konsouji.com/>

発行日 二〇一七年九月一日
(仏暦二五六〇年)